

災害常襲列島日本が築くべき国力としての総合防災力と総合土木力



岡田 憲夫
論説委員
熊本大学自然科学研究科教授兼
附属減災型社会システム実践研究
教育センター長 教授

最近立て続けに海外に滞在し、講演やディスカッションを重ねる機会があった。本論説で主張することはそのような実体験に基づいている。「なるほど外国の人たちには、日本はそうのように映っているのか。そのような期待もしてくれているのか。」と強く実感し、私の中である種の確信となってきたことがある。それをご披露し、学会員諸氏の参考に供したい。結論を先取りして示せば、「日本の〈総合的な技術と社会〉のシステムを世界へ発信する意欲と関心を学会員の私たちはもっと明確に持とう。それを伝えるためにも、豊かで魅力的なストーリー性を備えた創造力・構想力と発信・受信力を磨くように努めよう。」ということになる。これがメインメッセージである。

サブメッセージは、〈総合的な技術と社会〉のシステムの担い手は、多くの場合、広い意味での土木工学の専門家集団が中核を占めることが求められるということである。とりわけ、東日本大震災が起った後の世界の人の眼は、まれなる「災害列島日本の先進的体験を続ける人たち」と「そのまるごとの体験から生まれるかもしれない新生日本」に熱く注がれている(らしい)ということである。災害と闘い、乗り越えていく多様な知恵と知識と技術と、それを生み出す「まるごとの現場体験」を「総合(的)防災」と呼ぶことにするならば、「総合防災」はまさに日本の〈総合的な技術と社会〉のシステムを世界へ発信する対象としてこれほどふさわしいものないのである。反応がいろいろあればそれを受け止め、再度説明し、発信し直す。この意味で発信は受信を伴ったダイナミックなコミュニケーションでなければならない。

東日本大震災について世界に向けて語る体験を通じて

昨年(2012年)7月下旬から8月下旬、9月中旬から10月中旬にかけて、あわせて2カ月ほどカナダのオンタリオ州に滞在する機会を得た。その際、東日本大震災について講演したり、説明したりすることが少なからずあった。非公式のディスカッションや懇親の場も含めるとそれはほぼ20回近くに及んだだろうか? さらに短期の外国訪問でスイス、オーストリアや中国、韓国でも何度か講演をしたりした。講演の内容はその都度少しずつ説明の仕方は変わったものの、概略以下のようなことであった。

①総合防災力とそのためのもので多様な学際的な研究の一段の向上が求められること、②とりわけ「生き残ることを実践可能にするための総合化」が重要であること、③研究者としては現場での実践を重視しながら共有できる知識技術として伝える学問的研鑽が求められること、④多様な当事者(行政・企業・市民・NGO など)との協働的な相互学習とコミュニケーションの場づくりが不可欠であること。いろいろな質問や疑問も受けたり、かなりシビ

アなディスカッションを重ねたりもしたが、これらの論点は結果的に多くの方の賛同を得たように思う。この点では総合防災とそのため研究(総合防災学)を格段に進めることが国際的にみてもますます必要とされていると確信するに至った。

しかし同時に新しい発見もあった。日頃は国内に居てうすぼんやりとしか頭に思い浮かべられない「この国の目指すべき姿」が、地球の高みから再吟味されて明確な輪郭を描く、そんな感じであった。少し長く滞在し、現地のいろいろな人と交わる機会が多くあったため、「日本の国が外国人の人の眼にはどのように映っているのか」が本音も含めてかなり体感できたためでもある。

実は、世界の人たちは(カナダ、スイス、中国、韓国などの私が接した限られた人々が中心ではあるが)、意外なほどに「災害列島日本というイメージ」を私たち以上に明確に持っていると思う。もちろんこれはマイナスにも働かうるが、むしろプラスに働く可能性の方が高いのである。どこの国にもそこに住む以上避けられない「試練的テーマ」がある。「自然災害と闘うことを試練とされた列島に住む人びと」、それが日本(人)の個性であり、それを乗り越えて生き残る知恵や知識を身につけた国というある種の畏敬や尊敬の念に近いものがひしひしと私には伝わってきた。技術先進国日本のイメージがそれに重なって、「自然災害と闘う技術先進国」という「世界での役割モデル」のようなものが漠然と期待されているように感じる。もしそうであるとすれば、我が国はそのような「世界での役割モデル」をもっと自覚し、積極的にそのようなイメージがプラスに成長していくような情報発信・受信をすべきであろう。このことは、私が今回の一連の海外での講演や交流で多くの方から受けた次のような質問や感想、期待からもうかがえる。

確かに学習し改善すべきこともいろいろあるだろうが、日本という国は総じてそれなりによくやっているではないか? たとえば一両も脱線しなかった新幹線システムを築いた総合技術力をもっと知られて良い。でもその半面、福島第一原子力発電所の事故(FUKUSHIMA Daiichi Nuclear Accident と彼等は呼ぶ)など、いろいろと反省すべきところもあるのではないか? そのような体験と教訓を可能なかぎり検証して詳らかにしてほしい。社会的背景も分析してほしい。それを知ることは世界にとっても大切なことである。

東日本大震災を受けて日本はどう生まれ変わろうとしているのか? 災害列島に住み、アジアにおける近代化と民主化のモデルを示してきた日本は、過酷な災害を生き抜くことで21世紀の先進的な国としての新しいモデルとなしてほしい。

この意味で今まさに求められていること。日本の〈総合的な技術と社会〉のシステムを「総合防災」というストーリーで東ねて世界へ伝えることが日本にとっても世界にとっても切実な課題なのである。もちろん、うまく行っていること、そうでないことも含めて誠実さと説得力をもって伝える総合的なコミュニケーション力(総合土木力)が魅力となるはずである。